

Title	表現論(Adv-Adj-Nom構文について)
Author(s)	西川, 盛雄
Citation	Osaka Literary Review. 9 P.14-P.30
Issue Date	1970-12-14
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25731">https://doi.org/10.18910/25731</a>
DOI	10.18910/25731
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 表 現 論

(Adv — Adj — Nom 構文について)

西 川 盛 雄

### I

形式化され、音声化された言語（又は文字化された言語）は人間の認識構造の反映である、この認識構造そのものの実体は、人間の conscious な世界、unconscious な世界あるいは、言語学的にもっといえば Jakobson 流の code, Chomsky 流の deep structure の世界を明らかにしていても、なおこれを解明し尽くすことはきわめて困難なことである。われわれ言語（今は特に英語であるが）を考察している者、少なくとも私にとって少しでもできることは、内言が音声によって支えられて実現され、こうして外化された言語形式の豊富さを媒介にして、これを分析する中で、人間の認識構造の諸相の豊富さを少しでも明らかにしていくことができるだけである。この時には R. H. Robins のいう科学の3つの規準、exhaustiveness（包括性） consistency（一貫性） economy（簡潔性）が要求されるわけであるが。<sup>1</sup>

言語形式は認識の反映であるという時、私は単に機械的唯物論、又単純模写論のことをいっているのではない。認識は一つの外化された表現形式としての speech によって実現される、と同時に外化された speech が今度は認識にはたらきかけ、認識をより豊富にしていく、その意味で認識と言語形式とは相互媒介、相互浸透、という弁証法的な関係にあることをいっているのである。（このことについては、後日、稿を改めて取り組んでみたい。）

本稿で私は英語における frequent な表現形態の一つ、「Adverbial-

Adjectival-Nominal 構文」(略して「Adv-Adj-Nom 構文」)について若干でも考察(分析→総合)を行って行く中で日ごろの私のテーマである「表現」の問題を深めていきたいと思う。私の基本的な、論理的な立場(principle)は、割り切れるものだけを割っていく形式論理学ではなく、割り切れぬものの中にこそ本質をみる弁証法論理学である。

## II

まず具体的に問題提起をしていってみたい。

① ‘He doesn’t want to go out.’

‘I’m sorry he don’t feel well.’ the woman said, ‘He’s an awfully nice man, He was in the ring, you know.

‘I know it.’

—E. Hemingway, Men without Women

(「あいつ、外へ出ていきたくないんだよ」)

「お気の毒にあの方、御気分がすぐれないのですわ」おかみさんが言った。

「あの方とってもすてきな方です。けん闘してらしたことがあるのですってね。

「そうだよ」)

② George gave a cry and sinking into a chair, burst into tears. Lucy put her hand on his shoulder,...

‘Oh, I can’t bear it.’ he moaned.

She bent down and kissed him tenderly.

‘Be brave, my dearest, be brave for my sake.’

But he sobbed uncontrollably. It was a horribly painful sight.

—S. Maugham, The Explorer

(ジョージは椅子に沈んで、目に溢れてくる涙を抑えることができず、声を出して泣いていた。ルーシーは彼の肩に手をおいた。…)

「アーほくはたえられない。」 うめくように彼はいった。彼女はかがみこんでやさしく彼にキスをしてやった。

「勇気を出して、ね—あなた。私のためにお願いだから勇気を出して」  
しかし彼は泣いていてどうしようもなかった。それはとても痛ましい光景であった。

ここで上の2つの例を抽出すると次の通りである。

- ① awfully nice man
- ② horribly painful sight

語順は異なるが次の例なども同じ種類の問題と考えることができる。

- ③ I've seen my father, and he simply doesn't realize for a moment that he's done something horribly mean and shameful.

S. Maugham, The Explorer

(父親に会ったことはあるよ。父親はしばらくでも自分が非常に卑しくて恥ずべきことを云ったなんてことを気づきもしないんだ)

又次のように Adj が past participle になる例も同様に考えていきたい。

- ④ The road descended with short, barely rounded turns.

—E. Hemingway, Men without Women

(道は短く、わずかにわん曲をえがいて下り坂になっていた)

さて、今ここでさしあたって思い出されるのは O. Jespersen の文法の理論的支柱の一つである Three Ranks 説<sup>2</sup>である。彼は extremely hot weather, 更には furiously barking dog を例示して, tertiary-

secondary-primary の機能上における分類分けを行い、word-classes との対応を示しながらもこれと峻別して次のように説明している。

In the combination extremely hot weather the last word weather, which is evidently the chief idea, may be called primary, hot, which defines weather, secondary, and extremely, which defines hot, tertiary. (*Philosophy*)<sup>3</sup>

これを図示すれば次のようになるであろう。

extremely hot weather  
 II I I

又 adjunct (barking) の場合は次のようになる。

puriously barking dog  
 II I I

同じ流儀でいけば、例①②はそれぞれ次のようになる。

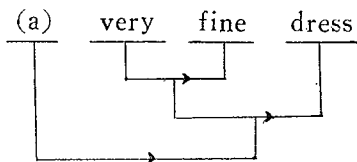
① awfully nice man  
 II I I

② horribly painful sight  
 II I I

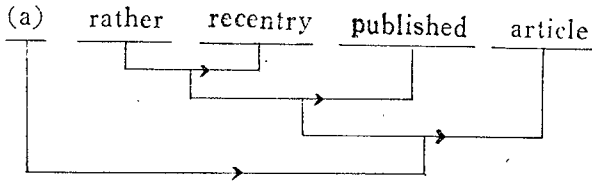
さて、これで Adv-Adj-Nom 構文の説明は “purely logical” に十分なものといえるであろうか。否、断じて否である。後でも触れるところであるが、hot は (或いは barking) は weather (或いは dog) を define しているといういい方は厳密には誤りなのである。

### III

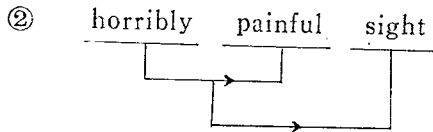
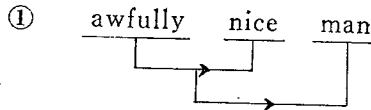
この構文における Nida (*Synopsis*)<sup>4</sup> の記述方法としては Secondary Postdeterminer Attributives の例として



又 Tertiary Postdeterminer Attributives の例として、



のように説明している。この流儀でいけば、われわれの例①②はそれぞれ次のようになるであろう。



しかし、ここでは、いわゆる surface structure の構成要素間の関り方の方向性と重層性を示した点において明晰な論理ではあるが、しかしあくまでも、機械的な記述操作で終始している。ここでは人間の内面、更には、認識構造がまったく問題になっていないところに根本的な理論的欠陥があるといえよう。けだし、言語学とは、言語事実の分析を媒介にして、人間の認識構造のあり方を明示し、総合することだからである。

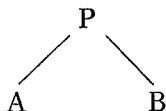
さて、私はここで R. Jakobson の selection-combination の概念を思い出したいと思う。<sup>5</sup> Syntactical Structure においては、phrase はその構成要素間相互の規定関係のあり方として定義づけられるが、そこではいかなる構成要素を select し、いかなる (syntactical) combination を形成するのかが問題になっているのである。問題は今、Adv-Adj-Nom 構文であるから、今それぞれの部分を X, Y, Z とすると、問題は X, Y, Z によって成る phrase 間の関係のあり方の総体なのであり、もっといえ

ば、X, Y, Z がそれぞれどのような姿で認識構造を反映しているかということなのである。

#### Ⅳ

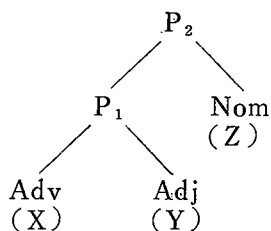
phrase とは、これを構成する要素間の相互の規定関係のあり方であるといったが、ここで Adv(X), Adj(Y), Nom(Z) がそれぞれいかなる関係にあるかを考えておきたいと思う。

これは単に形式的に、並列的に並んでいる三つの語による一つの combination と考えることは誤りである。phrase はその最小単位においては原則的に2つの部分から成り、そしていかに大きな phrase (例えば sentence phrase) でも、この二つの部分から成る phrase の重層構造の総体としてあるといえるのである。phrase (今 P と略記する) を model 化すれば次のようになるであろう。



この場合 A・B はそれぞれ P に内在化された部分として、一方が他方を規定し、相互の規定関係において二つの部分を統一し、主を P において豊富に実現させているのである。具体的に Adv-Adj-Nom 構文について述べていってみよう。

これは結論的にいえば、二つの phrase の重層構造の総体としてあるのであって、けっして一般的に考えられているように、三つの語が互いの修飾関係において並列的に並んでいるのではけっしてない。図示すれば次のようになるのである。

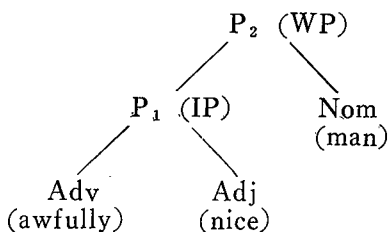


つまり、Adv と Adj は相互に規定し合い、Abj は Adv によって具体的に説明され、Adv は Adj によって実現され、両者の統一されたより豊かな内容をもったものとして P<sub>1</sub> が成立する。この P<sub>1</sub> は更に一つの部分となって Nom に関わり、両者は相互に規定し合う。ここで Nom は P<sub>1</sub> によって具体的に説明され、P<sub>1</sub> は Nom によって実現され、両者の統一された、より豊かな内容をもったものとして P<sub>2</sub> が成立する。このとき、P<sub>1</sub> は P<sub>2</sub> の中に発展的に解消され、それぞれ、Adv Adj は P<sub>1</sub> を媒介にして P<sub>2</sub> の中に実現されているのである。更に P<sub>2</sub> がより大きな phrase、例えば P<sub>3</sub> の一部であれば、まったく同様に考えて P<sub>2</sub> が媒介になり、それぞれ P<sub>2</sub> とそれに関わる部分とを P<sub>3</sub> の中に実現するという関係にたつのである。

具体的にこの間の事情を詳しく述べていかなければならない。

① awfully nice man

既に述べたところであるが、これは三つの語が互いの修飾関係において並列的に並んでいるのではない。こういういい方をしようとするれば、三つの語による二つの phrase の重層構造の総体としての phrase であるというべきであろう。その謂は次のように図示すれば明らかになる。





この図は Three Ranks 説の誤まりを証明するのに役立つであろう。つまり Jespersen のように三つの構成要素（語）を機能的な相関々係として3段階に分けるのではなく、その前に私は phrase の概念を入れて、もっと厳密を期さなければならないと考える。

awfully nice man  
 III      II      I

このような rank による説明の仕方では、この全体句（Whole Phrase—略述して WP）に内在している phrase の重層関係が明らかにならないのである。つまり whole phrase に至る媒介句（Intermediate Phrase—略述して IP）の姿が明示されないのである。

私は次のように考える。つまりまず第1に、Adv (awfully) と Adj (nice) が相互に規定し合い、それが全体句（WP）に至る媒介句（IP） $P_1$  となって内在しているのである。このとき Adj (nice) は Adv (awfully) によって具体的に説明され、又後者は前者によって実現され、両者の統一されたものとして、又、より豊かな内容をもったものとして IP,  $P_1$  が成立するのである。今度はこの  $P_1$ (awfully nice) は一つの新しい構成要素となって Nom(man) に関わっていき、両者は先と同様に相互に規定し合い、Nom(man) は  $P_1$  によって具体的に説明され、この  $P_1$  は Nom によって実現され、両者が統一され、より豊かな内容をもった phrase として WP,  $P_2$  (awfully nice man) が成立するのである。この時には、 $P_1$  は IP として  $P_2$  の中に発展的に解消され、それぞれ Adv Adj はこの  $P_1$  を媒介にして  $P_2$  において反映され、実現されているのである。

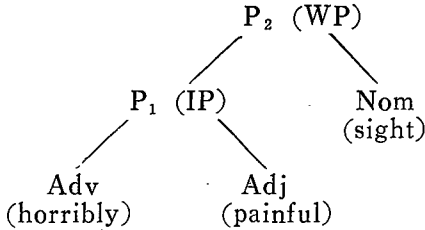
例②の場合にも基本的にはまったく同じように説明され得るのである。

“horribly painful sight” において、Three Ranks 説のように

horribly painful sight  
 III      II      I

と rank 付けしてみてもけっしてこの構文を説明したことはない。

既に指摘したように、誤まりさえ含まれているのである。つまり、これは二つの phrase の重層構造の総体としてあり、全体句 (WP) に至る媒介句 (IP) を媒介にして Adv, Adj などの構成要素がその全体句 (WP) の中に反映され、実現されているといわなければならないのである。これを図示すると次のようになる。



ここで思い当るのは Three Ranks 説の記述における形式性、直感性、更には理論的根拠の薄弱さである。Funke が Jespersen を論駁する立場は、言語学における意味的側面の解明を重視する立場であった。Funke が「意味上の関係が常に形式上の構造に対応すると思ったら大変な間違いである」というとき、彼は、言語記述の形式的な外面性の限界に触れているのであり、又「意味の側からいって従属という術語で一群の語の機能上の関係が一義的に〔多義的、あいまいではなく〕決定されるものか否か<sup>7</sup>」という問を発するとき、「従属関係」という用語のもつ意味のあいまいさと同時に「従属関係」を捕える理論的根拠の薄弱さを示唆しているのである。

## V

ここでは媒介句 (IP) Adv-Adj について述べていきたいと思う。

私は Funke のいうように、余り「従属」という用語は用いたくない。むしろ私は、二つの部分は相互に不可分のものとして関係し合い、規定し合い、両者ともその分業において他を排することなく、互いにより豊富にし合いながらより大きな単位をつくり上げていく中で実現されていくとい

う考え方に立ちたい。その場合、問題は、どのような相互関係で両構成要素は人間の認識構造を反映しているか、ということである。

人間の認識構造も相対立する二つの側面の矛盾として、又相互侵透として捕えなければならない。その二つとは、人間の感性的側面と理性的側面である。類語でいえば、人間のパトスの側面、又は感情的側面とロゴスの側面、又は論理的側面である。人間の内面は両者の側面が程度の差こそあれ、「場」の状況に規定されて、相互に侵透し、媒介し合って矛盾としての内的状況が生まれ、この矛盾が表現という行為によって実現され、止揚されるのである。そしてわれわれの日常生活における表現行為はこのことへの不断の繰り返しなのである。

今 Adv-Adj 構文 (awfully nice) に戻って考えてみよう。

Adj(nice) は「ある何かについて」の様態 “being nice” 又は “niceness” 或いは nicety を示している。これはこのまゝでは何ものでもなく、Adv (awfully) の規定を受け、具体的な説明があってはじめて生きてくるのであり、又そのことによって Adv も実現されるのである。そのとき、両者がそれぞれ人間の認識のいかなる側面を反映しているかが問題にならない。

もちろんこれは固定概念ではないが、一方は他方に対して感性的側面がより顕著に反映され、又後者は前者に対して理性的側面がより顕著に反映されているのである。例えば “nice” なのだ、しかも “awfully” に」というとき、Adv (awfully) に籠められた人間の内面の状況は Adj (nice) に比較して、よりパトスの側面、感情的側面が顕著に反映されているといえる。そして、Adj (nice) においては、Adv (awfully) に対してはあくまでも受け身であり、この phrase における土台として、何かの物象又は事象ここでは Nom (man) の様態を表示するものである。具体的には Adv に対して既述のように “being nice” 又は niceness 或いは nicety として定着させることができるところのものである。従って Adj には

Adv に対して人間の理性的側面が、反映されていると考えることができるのである。

ここで今、phrase は人間の認識構造の反映であるという観点から、感性的側面を S(sensibility), 理性的側面を R(reason) という initial letter を用いることによって phrase を  $sP_{1R}$  と形式化することができるのである。

ここで今までのところをまとめてみると次のように表示することができる。

$sP_{1R}$	
Adv	Adj
awfully	nice
(S) 感性的側面	(R) 理性的側面
認	識

次に人間の内的状況における感性的側面 (S) と、理性的側面 (R) についてもう少し詳しく述べていかなければならない。<sup>8</sup>

まず第1に、Adv は Adj に対して explicative な側面をもち、Adj は Adv に対しては thematic な側面をもつということである。この phrase において Adj(nice) は一つの様態を表示していることは既に述べた。このことにより Adj は Adv(awfully) に対して phrase 内では core な存在として thematic なものである。他方、Adv は Adj に対して commental な存在として explicative なものであるといえよう。Adj が Adv に規定されることによって豊富に実現されるというとき、Adv は Adj に関わ

って説明しているのである (explicative)。

又一方では Adj は Adv の規定を受け、Adv を実現すると同時に自らを豊かにして、この phrase の支えとなっているのである (thematic)。このとき、既述のように Adv は認識における感性的側面 (S)、又はパトスの側面が籠められ、反映されており、Adj については理性的側面 (R) 又はロゴスの側面が籠められ、反映されているといえるのである。

第2に、Adj は Adv に対して referential な側面をもち、Adv は Adj に対して self-expressive な側面をもっているということである。いいかえれば、Adv は表現におけるある様態に対する説明として主観的な表出を目ざすものであり、Adj は Adv に対してある物象 (事象) に対する価値判断としての様態そのものの指示、又は表示を目ざすものである。例えば Adj (nice) は、ある何ものかの話者の価値判断としての一つの様態 “being nice” 又は “niceness” 或いは “nicety” ということを指示し、(referential)、これを補い、豊かにするものとして主観的な話者の心状を顕著に表出するものとして Adv (awfully) があるのである (self-expressive)。このことから self-expressive な特徴は認識における感性的側面 (S) に関与し、referential な特徴は認識における理性的側面 (R) に関与しているといえるのである。

第3に Adv は Adj に対して peripheral な側面をもち、Adj は Adv に対して central な側面をもっているということである。ここでは Bloomfield 流の Head-Attribute という説明のしかたよりももっと広い射程をもつこのいい方をとりたいと思う。つまり、Adv (awfully) を受けてこの Adv を実現する中で自らをより豊かにしている Adj (nice) はその内面で “being nice” という様態を説明しながらこの phrase においては土台となってこの phrase を支えているのである。Adv はあくまでもその様態に対する主観的な説明であり、又 comment でもある。この意味において、Adv が peripheral、Adj が central の特徴を示してい

るといえるのであり、このことは同時に Adv は認識における感性的側面 (S), Adj が認識における理性的側面 (R) を反映しているということに対応するのである。

さて、以上のことを踏えて、媒介句 (IP)P<sub>1</sub> の認識の反映のあり方を図示してみると次のように表示することができるであろう。

sP <sub>1</sub> R	
Adv	Adj
awfully	nice
Explicative	Thematic
Self-expressive	Referential
Peripheral	Central
(S) 感性的側面	(R) 理性的側面
認	識

## Ⅶ

次にここでは上述した Adv-Adj 構文を一つのまとまりと考えて P<sub>1</sub>とし、P<sub>1</sub>+Nom つまり全体句 (WP) Adv-Adj-Nom 構文の認識構造のあり方を考えていきたいと思う。例は同じく①について考察していきたい。

まず第1に、既に述べたところであるが、Adv が Adj を、Adj が Nom をそれぞれ並列的に修飾しているといった考え方はあまりに形式的であり、表面的な捕え方にすぎる。けっして一つ一つの語が順々に、後位に来た語に関っているのではない。そしてそれは Jespersen の Three Ranks 説でいわれるような「単純」なものである。これは、まず Adv

と Adj よりなる媒介句 (IP)  $P_1$  が全体として Nom に関わっていき、Adv, Adj はそれぞれこの  $P_1$  を媒介として全体句 (WP)  $P_2$  の中に反映され、実現されているのである。

さて私はⅣ, Ⅴにおいて述べてきた立場において  $P_1$  と Nom との認識構造の反映のあり方を  $P_2$  の中にみていかなければならない。 $P_2$  は今次のように表示することができる。

$sP_{2R}$	
$sP_{1R}$	Nom

$P_1$  と Nom は基本的にはⅤで述べたところと同じである。 $P_1$  は下位の二つの構成要素から成る媒介句 (IP) として機能し、Nom をより豊富に説明しているのである。

人間の認識構造は、相対立する二つの側面の矛盾として、又相互侵透として捕えるとき、(その二つとは既述のように感性的側面と理性的側面であるが、) これは具体的には phrase に反映されてくるのである。全体句 (WP)  $P_2$  の場合、 $P_1$  においては“awfully nice”として人間の感性的側面 (S) (パトスの側面, 感情的側面) が反映され、Nom においては“man”として人間の理性的側面 (R) (ロゴスの側面, 指示的側面) が反映されているのである。つまり Nom (man) はある物象 (事象) の反映として一つの事実判断を表示しているのであるが、 $P_1$  はその物象 (事象) についての感性的な、従って主観的な判断として一つの価値判断を下しているのである。この間の事状を図示すれば次頁のA図のようになる。

更にこの感性的側面 (S), 理性的側面 (R) の内容をⅤで述べた3つの特徴も加えて、詳しく問題として来た Adv-Adj-Nom 構文をまとめて表示してみると次頁のB図ようになるであろう。

A ☒

$sP_{2R}$ (WP)	
$sP_{1R}$ (IP)	Nom
awfully nice	man
(S)                      (R)	
感性的側面	理性的側面
認	識

B ☒

$sP_{2R}$ (WP)		
$P_{s1R}$ (IP)		Nom
Adv	Adj	man
awfully	nice	
Explicative		Thematic
Selfexpressive		Referential
Peripheral		Central
(S)		(R)
感性的側面		理性的側面
認	識	

さて、便宜上これまでは例①を用いて説明して来たが、例②の場合も基本的には同じである。又例③の場合は Nom が “something” でこれを説明してくる  $P_1$  (Adv+Adj) は後位に来ているだけであり、基本的には同じように説明することが可能である。例④にしても Adj が past participle になっているだけである。



## VII

こう考えてくると Adv-Adj-Nom 構文は次のように結論づけることができるであろう。

Adv-Adj-Nom 構文は

- ① 三つの語による一つの phrase ではない。つまり
- ② 三つの語が並列的に並んできた一つの phrase ではない。
- ③ 二つの phrases による重層構造の総体としてこの phrase が成立している。
- ④ 従って Jespersen のように primary-secondary-tertiary といった ranks をもつ構文ではない。
- ⑤ むしろ③に関し、媒介句 IP があり、この IP を媒介にして Adv Adj は全体 Adv-Adj-Nom 構文の中で実現されているのである。
- ⑥ 従ってこれを Three Ranks 説で説明するには、Funke とは違った観点から、やはり彼と同様に、「彼 (Jespersen) の大きな欠陥はまさにこの単純性の点に存する」ということができるのである。
- ⑦ phrase とは人間の内面における認識構造の反映である。
- ⑧ 認識構造とは大きくいて人間に内在する二つの相矛盾する側面、(感性的側面、理性的側面)の謂である。
- ⑨ Adv-Adj-Nom 構文ではまず Adv-Adj が媒介句 IP である。
- ⑩ この媒介句 IP の認識構造の反映のあり方は P.20 で表示した通りである。
- ⑪ 次に Adv-Adj-Nom 構文を一つの phrase として、全体句 WP とし、その認識構造のあり方は P. 22 で表示した通りである。
- ⑫ 全体として、Adv-Adj-Nom 構文は primary-secondary-tertiary といった “purely logical” なものとしての説明だけでは十分ではなく、(これでは人間の内面の認識構造の実体がほとんど明らかに示されないし、又これは本質的には直感論である) ⑩で示した観点から、AdvAdj は

媒介句 IP を媒介として全体句 WP の中に反映され、実現されているのである。

⑩ そして、やゝ複雑ではあるが、Adv-Adj-Nom 構文の認識構造の反映のあり方については P. 28 で表示した説明ができるのである。

### Notes

1. R. H. Robins, General Linguistics : An Introductory Survey
2. これをめぐっては O. Jespersen と O. Funke の論争があり、本稿は中島文雄・訳の「Three Ranks 説批判」を参考にしてている。
3. O. Jespersen, The Philosophy of Grammar, Chapter VII
4. E. A. Nida A Synopsis of English Syntax Mouton
5. R. Jakobson, & M. Halle, Fundamentals of Language, Mouton.  
 Speech implies a selection of certain linguistic entities and their combination into linguistic units of a higher degree of complexity. (P. 58)  
 ..., selection (and, correspondingly, substitution) deals with entities conjoined in the code but not in the given message, whereas, in the case of combination, the entities are conjoined in both or only in the actual message. (P. 61)
6. 「Three Ranks 説批判」(中島・訳) 研究社
7. 同上
8. 以下に述べるところは詳しくは熊本大学教養部、紀要、人文科学編第 5 号(1970)の拙稿「表現論 (Inversion について)」に述べたところである。
9. 「Three Ranks 説批判」(中島・訳) 研究社  
 彼(Jespersen)の大きな欠陥はまさにこの単純性の点に存する。(P. 23)